五巻之内

下終ル

年

靈雲園集

古代歌巻第三　付句

一むらの雲ふきとめよ風の神　（朱）時雨を待てあそぐ　風食

みりをぬるごとき宮こ川よちのさ
きみのよ棹さして歸よのぞこ。某うたて男そ人のあろ
ねうぐひすととぶめろとぐひ。老樹菴山精といふてかさ
けちう粉ふまろとも

○樹神　倭名云文選蕪城賦曰。木魅。山鬼。今按云
魅ハ即チ樹神也。内典云。樹神　倭名。古太萬

○廣異記云。山魈ハ嶺南ニ在リ。獨足ニシテ踵後ニ向フ。手
足共ニ三岐アリ。其ノ牝ハ脂粉ヲ好ミ。其ノ牡ハ金錢ヲ求ム。
唐ノ天寶年中ニ。北地ノ商人。嶺南ニ至リテ。山中ヲ行クニ。
忽チニ牝山魈ニ遇フ。再拜メ脂粉ヲ與フ。甚ダ喜ビテ曰ク。此ノ
樹下ニ安寢セヨ。我能ク衛ラント。中夜ニ兩ノ虎來リ。山魈
乃チ手ヲ以テ虎ノ頭ヲ撫テ曰ク。斑子去レ。我客在スト。兩虎
耳ヲ弭テ去ル。夜明テ後テ辭謝ノ別ル。山魈甚ニ慇懃ニシテ
隱ルヽ。是山精。山魈。山都。木客等ハ。皆其形チ人ニ似テ。
山中ニ居棲ス。老樹空洞ノ間ニ住ト云フ

○太平廣記云。桂陽ノ太守。江夏ノ張遵。字ハ叔高ト称ス。
初メ山陵ノ間ニ隱レテ田ヲ耕ス。町頭ニ大樹アリ。幾年ヲ經
タリト知ルヘカラズ。本ハ十圍ニ餘リ四布ノ穴ヲ覆テ。枝葉
繁シ。其根蟠屈ノ傍ニ穴ヲ生ス。願ハ山田ノ害ト爲ル。人ヲ

雇フテ是ヲ斫シムルニ。斧ヲ下ス則チハ。其木大ニ血流レテ出ツ。人驚キ怖レテ。歸リテ告ルニ。叔高大ニ怒ツテ曰ク。老樹ヲ伐ニ。大ニ汗出ツ。其色血ノゴトシ。何ノ恐ルヽコトアラント。自ラ往テ是ヲ斫ニ。血ノ流ルヽコト夥シ。叔高更ニ悔レトモ甚タ尺許ト見ユル穴出テ。叔高々々ト呼ブ。叔高スナハチ刀ヲ拔テ撃殺ス其ノ跡ヨリ續テ。四五人ノ老翁衝出ルニ。左右ノ人皆十驚キ怖レテ地ニ伏ス。叔高膽氣勇然トシテ。神慮撓マズ。其翁ノ狀チ人ニ似テ人ニ非ズ。獣ニ似テ獣ニ非ズ。走リテ山溪ク潜ル。果ノ樹倒レテ傍ノ田地。溝作ヲ得タリ。其樹ヲ伐タル叔高。辟レテ司空御史ト爲リ。兗州ノ刺史ニ作ル

○多智巻云いとゞ如此おりひるがえして。これ

人のねうちしふ。書戸をとぢてゐるうちは。しうをあらふことをしらず。ちうそをきわたりてゆくさきをしらず。いうんもあうぞうすとわをひたらーをかうまうれむ。よりそ思もなをもとめてぬるくとぬるまいぎのくをみざるくへとさゝゝしく人のそしりもひとうろなりぬ。

（紫）末履かをさうろ

ホクリ

ささうせねとゝ

諸式巻下

猿乃下みち

談夢

馬奴(マカタ)などのたぐひなり。驛路(ウマヤヂ)乃末(ノマ)つかのねなり。草鞋(ワラジ)すこし古屐(フルアシダ)やうの物をはきて。各競(カケ)走(ハシ)りひとそそのみよりうしろにたつをいふ

○合歡木(ネブノキ)　倭名云。唐韻云。櫬音親。和名。祢布里乃木。辨色立成云。櫬ノ樹。合歡木ノ其ノ葉朝ニ舒(ヒラ)キ暮ニ斂(ツボム)者也矣

○多識云。合歡(祢布利乃岐)云。祢布利乃幾。今俗矣

○下學集云。合歡木。櫬(スヒキ)木。歡或作(ス)昏ニ。杜(ト)甫(ホ)ノ句ニ云合昏尚(ネブリノキ)知時(ヲシル)也矣　○文選ニ云。合歡(ネブリ)除(ノ)櫬(スヒキ)ノ云云

○萬葉集云。紀女郎贈大伴家持歌(ウタ)よ　ひるそ咲(ヲ)よる乃(ノ)名(ナ)乃(ノ)ねぶ(ツク)流(ル)ねぶ(ツク)流(ル)ねぶ(ツク)流(ル)恋(コヒ)をわ(ワ)れ(レ)はする

家持返(カヘ)し　ねぶ(ツク)流(ル)とも君(キミ)にあはめやも夜(ヨ)乃(ノ)ねざめ(ツク)の恋(コヒ)のまさらまく

○嚢(フクロ)嚢抄云。合歡(エンブンノキ)木。槐(エンジュ)ト。合歡ト。同類ナリ。葉コマカニシテ。

卜モニ夜ルヌルモノナリ云云　○私ニ按(オモフ)ニ。ねぶ(ツク)流(ル)人(ヒト)よ。寝(ネ)べきまよ(ツク)ろ

○盍簪翁撰能毒ニ曰。合歡(ネブノキ)安ニ五臓ニ利ニ心志ノ生歡ニ去憂。明目殺虫。消ニ癰腫。續筋骨。補ニ陰ニ擯ニ一切ノ欬嗽。収ニ肺氣ニ矣

○山本亡羊(ボウヨウ)曰。合歡木ノ灰中ニ埋(ウヅ)ミ大ニ久ニシテ。其(ソノ)灰ニ入ニ鐵漿ニ小ニ水蒸ニ中ニ煮ニ一ニ沸ニシテ。毎日ニ一ニ沸ニシテ。久ク煮ルニ。

朱　ほのぼのと明(アケ)ぬ(ツク)流(ル)あふ(ツク)さかの　百(モヽ)人(ソヽ)乃(ノ)院(ヰ)　康吟

をよくぬ乃やそ宇治川乃星の長(ナガ)堂(トコ)あつめてそ

しるのたま人なをりそ月よまつやあるらん

○記(シル)月令ニ曰。腐艸(クサリタルクサ)化ノ爲ニ螢(ホタル)。○朱子曰。腐草爲ニ螢(ホタル)。離明之極。故ニ幽類化ノ爲ニ明類ニ也　○腐艸ハ朽(クチ)タル草ナリ。濕熱(シメアツ)ノ

氣ヲ得テ。變ジテ螢トナルナリ ○唐李子卿カ水螢賦ニ云彼ノ何爲而化ニ艸ニ此ノ何爲而居ニ梟ニ云云

○螢雪ノ事ハ下ニカケリ

○螢火ヲ以テ書ヲ照ス事ハ晉車胤カ博覽多通ノ家貧ニシテ不常得ニ油ヲ夏月ニハ則チ練ノ囊ニ盛リ數十ノ螢火ヲ以テ照ニ書ヲ云云 蒙求

○僧以仁螢詩云度氷穿雲窗又踈紗囊曾聚舊茅廬晝堂銀燭明ヲ如ニ晝ヲ只照ニ塗歌不ニ照ニ書ヲ奥ノ意ヲ云云

○右和漢語ニカケリ

○右和漢語ニカケリ

○晉車胤博覽多通ノ家貧不常得ニ油ヲ夏月ニハ則チ練ノ囊ニ盛リ數十ノ螢火ヲ以テ照ニ書ヲ云云 蒙求

○僧以仁螢詩云度氷穿雲窗又踈紗囊曾聚舊茅廬晝堂銀燭明ヲ如ニ晝ヲ只照ニ塗歌不ニ照ニ書ヲ奥ノ意ヲ云云

肉裏を百數と申ことそ。百官乃產をもつて有なり。百姓と
いつそ。そなみもつてぞ。
青 ものくいあつぐぶんぐ。百察乃俊なつて中位なり
猴を言づれ猿 あそれなり 如竹
猿そ猴つ仍て大なり。色黄か或そ黒くおつ乃脊長つて
古乃を蹴で。春暮乃氣膽的あつことにな。
山峡乃月か嘯さ。澄れちぐれよあそびて鉤とたれ三秋の
果往會つて手ふ叫ひ。人つ離つれて朝夕四乃茅を
よ待つひ。書に三ジ乃猴つ宮ぐ山公を称つて
書往往でそと言ふ。筆を揃づき工なさて
あつぐ。○著聞集をひ。猴猿ぞとい
往者乃傳あり。約夕猶一をるふ。こつ乃猿ここつて往

を呼ぐつり。二ここるをそ猿小男くいあそう。海
何乃者つ常にまこつぞ。一往を書をこんとねまつこ
いつそ。山猿掌を會く傳を礼奉ーくりあれよ。
れつほふふ。そこつ仍て猿乃ふなつぐ。救百乃猿乃つまりて。捕乃まを
負てまつこく傳のおなつぐ。垂つり。山猴仍それをこつて
彼つ漏せて。やつぐく往を書をこ。そあひぶ。山猿さまくの
藁往もちこく見こにあつこくつり。おつこくひこくをめぐり
巻にいつこと紀。山猿乃てぐぞ。あやーくこつひこくをめぐり
てりこむこにおつ山乃奥ふ。かつこつ藁乃管をこつこく。か
ら往宮乃中よ入こぐこつちまにーくぶ山猿死こくこ。やまの
いもとよくほりのて。宮ふちつてえあぐこすーて死
こそこあり。傳ありふ。ーこまつこくこわなーその猿
かぐるを堀こて會仏ーておつぬ。そみくち往をぐ。も往つ
ぐーてぞる乃仏おのぞこーこを中よ納ーて

きぬぞれよりのち四十余年を経て。紀躬高朝臣。当国の守にありてくだるさまりけるに。先従ふ者にまうでて。住僧をめしけて問ひ尋ぬ。かしけるふ書をとりてざるる経やれりしまとたづねられば。そむかしの梢経の僧いまそいはさて八旬の齢にあまく出て。此経の根源をかたりけり。自ちさふ飲ちんして。いろく。我此殺を果さんがためふ。今当国のもとに侍りけりまそりむかしの猿そ我なり。経の力によりてく人身をばきろなるさとて。則て又二の部を書なまり。かみなるに今になりとそと

私云 此事元亨釈書にくわしくみえたとて侍り。此因縁は観音をあづとといつふがれるよりもあるづきとと書付侍るを

○異聞録ニ云 王績ハ博學多識ノ士ナリ 嵩山ニ遊テ 心ヲ樂ミ月ノ夜風ニ嘯キテ吟詠ス 忽チニ一人ヲ見ル 胡鬢雪ノ綴リ雙眉霜ヲ置ク狀チ瘦テ長高カラズ自ラ山公ト称ジテ来リ座ス。與ニ王績揖禮シ文理ヲ談論ス。異義既ニ言外ニ出ツ。王績意ニ疑フ。是レ定メテ怪物ナラント。潜ニ匣ヲ開キ鏡ヲ取ル。其光リ出テ座ヲ耀カス。老人即チ聲ヲ失シ俯キニ伏シ。化シテ猿ト成テ倒レ死ス ○列子云。宋ニ有狙公。愛シテ畜猿。而家匱。將ニ限ニ其食ヲ。云。昇若ニ芧朝ニ三而暮ニ四。衆狙皆怒ル曰然則朝ニ四而暮ニ三。衆狙皆悦矣

○賓常香山館ニ聽子規詩ニ云

楚塞餘香聽漸稀　斷猿今夕讓沾衣
雲埋老樹空山裏　彷彿千聲一度飛

東乃人の居まゞ。紗の人と語りけるに聞せ。牛乃力うりもひきまぬる部のちるをも一紙よのせてく。子規をとる得やまくむかへおりそ深き宮ふやしまりれて。へりしまうまね。淑女乃よさきむをとめも。水鮮乃跡くるわあさ。源なり

隙そそう家ゐよびそ。おそそそそそゐ墨をたそうこれ
筆視乃ひとり世小窓そうそそそそそや。審て視を隔
江とゐつを。筆銭毛頴そそたを墨を陳そとゐたる
紙と楮先をとゐつをて。文房乃宝とゐそそ。韓
文うれそそう。又視ノ字六経よ見てそ。濆乃せより出
ゐそいつそ。百川学海よ記せう宝なり

○古今製作原始云。伶倫作冗造硯矣 ○後漢李尤
墨硯銘云書契既造墨硯乃陳則是茲二物者與文
字同興於黄帝之代也事物紀原

紫 外書之部 楠公 ノ軒

ちちやうこ。我乃社のそ一免をはうりそ一まうを
をむうつそ。天満之居融よ。邪さびそうこをりうまうさ

東行南行雲剛こ。見うり還こととやうまうこ。右をそ傷よ
きそ宮むうこさえ。紙屋川乃ぴるとびー糸をぴとゐたる
乃下水あうたうつだうり。帝向の社宝あそあて。南社乃毒
そうゐをそそんタ乃宝ぴ。おそそそそそそそそそ
邪小野の天邪いお大宮宝系多宮乃奥ちり。人王六十
二代村上帝天暦元年六月九日小雲よ遷座あるぴばは
邪三座乃内。東乃間そ中将教。呂宮邪の嬬みなり。中ノ
間そ菅丞相道真公。西ノ間い吉祥女。則チ菅丞相乃宝也。
いまそ行きう家の女とゐまをとゐそ。一説よ西園寺
家の女ちりと。郎乃南吉祥院乃里よ住ゐ。ねお吉祥
女とゐ伝ふとそ。元亭教書。神社考よ委。又雑別府志
等ゐを抱記さるとそ。おそそ署ー侍う。ぴとゐぴそ。
抱そく社そ小雲をかうぎるべきにあそぴ。社よそうぴるべ

ふと。天滿神を風月の主。なれば。文道の大祖。多く梅を
詠寵愛の深くいとそ。ぐんで。もさ〻はのるをみむも
く。若。渇仰の頓致。俊。恭敬の掌を合せさ〻んや。
かゝるのへは燈をとぐ。梅のひら〳〵てう〳〵を。小野の春日
よゆなり。ゆゑをのまり

○菅家文草云。齊衡三年乙亥于時年十一歳。月夜
見梅花といふことを　月輝如晴雪。梅華似照星。可憐
金鏡轉。庭上玉房馨　矣

○拾遺集云なりけれ
　　
　　
　　
　　

○御述作ノ物　菅家御集　哥　菅家文草　詩　菅家後集　於二
文詩一
菅家萬葉　詩哥　類聚國史二百卷　日本紀ヨリ三代實録マデノ
事ヲ聚メテ部類ヲ分テ考ヘ

ヤスキヤウニアリバ
サレタル書ナリ　文選文集等ノ点菅家付サセ玉フト也

○薩天錫題二天滿宮一詩云

　無常說法現二神通一
　萬事夢醒雲吐レ月

○菅家集云　贈右大臣家小野社の前の
　
　
　

○新拾遺神祇

　
　

○南禪寺村菴題二北野廟一詩云

　北野曾聞二菅雄一人　風流後世號二詩神一
　梅花不レ與二乾坤一老　五百年来一樣春

○蹄疾集云。乾德在レ田加見レ龍。讒波頻起漾二尊容一。神
靈可レ畏動二天地一。千歳猶存一夜松

其二

吉凶榮辱雜揉來賢亦殆身無妄災誰道無情更無一智鬼遷宰府故園梅矣

○大鏡をゝあるに人丸神乃ほ作の哥をゝ面白くして。東行南行雲耶風耶。二月三月日遅遅ゝ吟ゝりまるれど。天神ほ滝宮ありてとうほふゆきかうほふゆく」をそうぐゝさにらぎやよひ日うらゝく。とゝろ誰ぞべれと作られてとなんいふ

紫

たもとをのみそめるのようん

榎川

○濱世継をゝ。芸能樹信といふもをゝ。あるに僧房乃池の蓮よ。多れ多我うゝをとりてく籠りて入てく御ゝる程ゝ。営乃籠よりへてくをのゝくめをゝれど。営れよ

紫

しけ事をおもひもうさゝ。澤館の扉

驛路乃鐘

拝口

旅人の笠も袂やあるふ雪ほろゝ朝。凍てうさ。澤館の扉をゝゝ。酒やあるふ鐘てたゝゝよ。劇ゝ営よ物。いそれどゝゝゝ。一盃一盃復一盃のゝゝ。鐘を撞ゝゝ急むと。すゝをとゝぐめてゝれそいろにゝみそとゝぶもまそ。驛路乃鐘ゝ。鐘ゝ催ゝ。ゝ勿ゝ。戯言ていふゝし

○驛路鈴ゝ八勅使よ。帝よりゝの

月を遍き鼓子花の巻

金虎

鈴聲夜過山驛矣

いうるかしこき人の部ひまいりむつくしくなりいて
車二乗のちごとをかうぼうの月をあるやをとくぶしん信よ言さんこの住吉
てうううやまいてへよまでいまをまつ。藁ぶきたるとまやかま
びをしく。月もはうぼうをひとめさそれど。花ちのい
ぶろくさまるまタぐはのうちうちるしれ
りのでさうりなく。秋の歌合のなひなし。新酒の杯

新乃なぐれよりや大原女

松舞

ちゐさ糸より三里余小乃方なりけり里人い。黒木

ぬれぬはあ乃一とゑのをかうへ

○鼓子花　大全本州第七云旋花俗謂鼓子花其葉似薑花赤色味辛美子牀如豆蔻此旋薑是也矣

○本州行義第八云旋花蔓生今之河北京西關陝田野中甚多最難鋤芟治之又生世又謂之鼓子花詩其形肖也四五月開花矣　○多識云旋花波也比登久左今案ニ比留加保是鼓子花也矣

○鄭谷經ニ賈嶌墓ニ詩云。水繞荒墳縣路斜。耕人訝我久咨嗟。重來兼恐無尋處。落日風吹鼓子花矣

は炭やきと荷擔して。都の人に賣る。世渡りたつきとせり。山住にて常にさびしく。物あはれなる所なり
彼平相國清盛公の女。建礼門院世をいとひてかくれ住
玉ひし舊蹟。草生の寂光院といふ。今に侍る。東向にて
僅なる茅葺なり。地蔵菩薩を本尊とし。其左の方に
門院の御影をうつし給へ。其ひだりのかたに。少納言通憲入道の
女。あはの内侍の像あり。院のうしろ後山町ほとりに。女院の
御墓あり。皆むかしを忍ぶ名残なり侍る ○此所の名所
芹生の里といふ。大原里の中にある一村なり
○拾遺集 すみなれし人のかへりて大原や芹生の里のおく
の杉れ岩かげ 忠経 ○名寄二 世をそむく門をたてまつり
大原やせれうの里の草のいほり 後徳大寺
○呂律川 大原勝林院の前。潤水路を挟て南北の二
こけ。これ水の名所。其ゆへ所つかさ、此はひとつ律に変じて。故に二川

合て呂律の川と号し侍る
○音無滝 勝林院の東の山にあり。瀑水岩の稜に傍て
流る。音あれど音なし。あまりにてけとも水なきの
○新拾遺集 都人ききねばきたる紫雲の瀧とぞ流
いひにしなりけん 範国法師
○朧清水 寂光院の前にあり。ちいさき池なり。建礼門
院。東山長楽寺にましましし時。うつりおはしませ給ひ時。神めぐく
寂光院にいらせ給ふさき此清水のそばにて。夜すがらひとつ
し見給ふとぞ ○西治院百首 朧月夜月よ水もおほ
ろの清水さへ見はてまもあまりて面かくしして 家長
○続古今集 後白河院かくわさ給ひて。大原に
おはしまして 順徳院
入月の朧の清水いかにしてつひにすむべき影をとどめん
○家集云 秋の比おなじ寺の清水をたつねて

右多やいたる飛乃ほ
○良運舊坊　僧林
るとおよ遊りよ。各る
なごろくくちを同よ。各くこと山野を良運う回坊ういい
うでうしるせくくむやと。へて感歌乙くるもとくこ
件乃良運の坊いまふ
運う書付るおの乃歌いまくくこ
山里のうをあるれ
けるのは給まふ入付う
○小野篁回往　右多上野村うる。世よ侍よるむうの山世
荘け所ふありく。けくす
○大原　家集ニ
のうやうりうくく。
○職人を歌合云　九番左　岩綾

秋まくくい畑をたくね岩やさのんとすまた月とろる
右　小多女
一そくふさもくやと小多女ありもとそ入うの月
判云。右そ月をそてあそふいひ山風情
面付連歌をとおいひうーをれ。計風情
うのとよありいひうーをうやと。右そ合ふ入
にうくろおそ
○啼疾集題小原於女詩云
皇后已ニ従ニ西海ニ帰ル　小原庵室聽戯教
侍児流落若斯否　日ー日　戴薪售帝幾ニ

（紫）
七多ろまてくくて霜乃いるう
蕎麥　○孟詵食經云。蕎麥　蕎音喬。一音驕。和名曽
矣　仲秋うそくくて。麥をよ苅とうり　波牟岐。二云。久呂無木

松白

○白氏文集村夜詩云。霜草蒼蒼虫切切。村南村北行人絶。獨出門前望野田。月明蕎麥花如雪矣

○云々百番の合云々

なかくもうとさ宵乃つま宮乃

むらの塔婆てらの石　信生

○白氏文集云。江作水声乃如愁。江作月色乃如愁。愁人不聞愁江水。不見江月照高楼。高楼愁人月中望。江水江月何悠悠。

○万葉集云。紅深染乃衣乃色乃如。浅らば不有とも。なくく。なくく。乳母乃懐乎。

○源氏物語。須磨の巻。

○文選

塔のよふ乃くろ雲乃わかよふはけふの雨乃。ふるなるへし。

塔婆乃よふ。あるもの。

○万葉

追くくひくらし。そのゐもをとりつゝ

おく人乃なふたのしやとあやしまん

注をさゝぎんとくく我か歌をきゝとも。

絳(ヨロヒ)帳乃とをりくく我造(ツク)る塔を倉(クヒ)やぶらんとせり

程ふ。我もるいち。彼るを退ノ退にるりや。
そるる彼するてくさとくるにくうまでもたふ
書をろ続みてもん
よにさくぺにあをも
ぬるのと

○艸山元政和ス隣寺晩鐘

隣寺鐘鳴テ暮景清シ　獨リ憑テ曲ノ几ニ也堪ヘ聽ニ
日昏レ聲罷テ捲テ簾看ハ　塔影入テ窓ニ初月明カナリ矣

○塔　釋氏要覽云梵語塔婆此ニ云フ高顯ト今畧称スル塔ト
矣○諸經要集云塔ト者或ハ云フ塔婆ト此ニ云フ方墳ト或ハ云フ支ト
提ト此ニ云フ滅惡生善處ト或ハ云フ計藪婆ト此ニ云フ讃ト正音ハ名ト
爲ニ率都婆ト此ニ云フ廟ト廟ト者貌也卽是靈廟也矣
○僧祇律云有リ舍利名ケ塔ト無リ舍利名ケ支提ト矣

○毘婆沙論云昔人取ニ小石ヲ爲ニ塔ト其福等ニ大塔ト矣
○法華經云聚沙爲ル佛塔ト如ノ是諸人等皆已ニ成ス佛道ノ
矣○寶筐印經云若鳥雀鵄鴿狗狼野干蚊虻
臓之類暫来ノ塔影ニ及ヒ踊躍ス
入ル佛家ニ頭ル法ノ財ニ況ヤ有テ聚人ノ或ハ見ル塔形ヲ或ハ聞ル鐸聲ヲ或ハ聞ル
其名ヲ或ハ當ル其影ニ罪障悉ク滅ス所ノ求ル如ノ意ノ現ス世安穩ニ得ル生ニ
極樂ニ矣

(青)

海月の貝殻借うす海月哉

秀政

○羅浮子庵丁書録ニ云海月ヲ眼ヲ一ツ水ヨウノ蝦ノ蟹ノ
ごとし。ゆえに蝦ありて人ありてこれを
ほふ。海月をほいでもつむなり。文選ニ
水母目蝦トいへるはこれ石廩ノ蠏ノ

まの底に塩けあひて。海月とひとし。其を洗よくのへ
て薑の酢にて食ふ
○又蝦なる江湖より出る物は色あかし。鹹地より出る物
は小さくして色あをし。湯にゆでゝあかく成也。唐土
まくハ。鮓にして食ふ。蒸ても食ふ。ちゞかとの事にても
食ふ。至て大きなる物をぞ海蝦と名づく。海より出る者也。
鮝にしても食ふ。乾してもくふなり。海蝦は伊勢えびなる
事也矣 ○越絶書云。海鏡蟹為腹。水母蝦為目ト矣
○南越志云海鏡ハ一名瑣蛣。是両片相合ス。殻円キコト
鏡ノ如シ。内ニ小肉アリ。腹ニ虫アリ。大サ豆ノ如ク。状蟹ニ似タリ。
海鏡饑ルトキハ。蟹出テ食シテ帰ル。海鏡即チ飽ト云云
○崔禹錫食経云。海月一名ハ水母 和名久良計 貌似月在ル水中ニ。故ニ以テ名ヅク之矣 ○多識云。海鮀 久良計 異名水母 拾遺

○海鰕 宇美恵比。今俗ニ伊勢恵比ト云矣
○丈木抄 よそに我世をうらむもむ老あひのなくらがらふらでまりぞなき 仲正
○同抄 我こそは海の月をぞ待らくらげの骨ありあはせありやと
○長明海道記云 海老は浪にかゞみて腰ハすがたに老ぬ。生涯
ままよふるとしに老てあしかゞまるが。海老はおもるや。
らくつね食ひていくほどぞ。手鞠はたらきぞとこそ

朱

あら海の師とてもむらふあさがほ　田龍

あるひとつねの名利をすてたる人に。出離生死乃要文を
まなびてよりぞがなのに悦る牽牛花を描きて讃し
鉄 かゝるやいかにあだなるをさまる一はかなさの花よさき

そうつとゐるのもそうごんぎょうです。（イニ）

○心ノ師　涅槃經云。願作心師。不師於心。欲得不退菩提。當發此願矣　○同經疏十一卷云。前心起惡。後心隨緣者。此非心師。前心起惡。後心即息。是則心師矣

○おほのかうんしんのかうんしんのかうんしんとをもふこころをさすなりとあるなり

○茶毘集云。諸乃至大納言。干時かんあふやの

諸乃世のそうめさをおもふにたえざるなりとをもふこころをさすなりとあるなり

○水鏡云。伊尊人乃ことのうちにこそ人乃こころをさそうよあるなるよあるなるのんなるよそ。そうめさをおもふにたえざるなりとをもふこころをさすなりとあるなり

○梁廻（ノエ）　波（ハウ）　ぜんしゃうきょうのはざまをとうるがごとしとは。ぜんしゃうきょうのはざまをとうるがごとしとは。

一大事をあさるめぐ。海廻のもひとりぐ。一心を

○淨華院向阿（カウア）上人云。あくれうごうのいまの罪（ツミ）を滅（メ）して。なむあみだぶつ（ミヲ）名利乃

○淨華院向阿上人云。あくれうごうのいまの罪を滅して。なむあみだぶつ名利乃

たのふそうりをくんしんよわいひとあうまたぐ

世をすてゝ。さてぞたれもあうまでうあうぴ

なうくん人乃ものどうすうもいてことせん。

ぎょうもそうごんぎょうもそうごんぎょうもそうごんぎょうの。

霸一枚乃月の枚一指

松雲

○温庭筠商山早行詩ニ云晨起動征鐸客行悲故鄉

○牽牛　本草補注云。娘ノ出ル田ノ野ノ人。牽牛ヲ易薬ニ故ニ以テ名之ヲ矣

私ニ。向阿上人者。淨華院之開山。淨土宗乃精藉也。

「歸命本願抄」「西要抄」「父子相迎抄」「三部七册乃聖教ヲ述作セリ。猶離穢土欣浄土ノ意ヲ述テ人ニ平生ノ心ヲ書ヲ示シ給ヘリ。

難聲茅店月。人迹板橋霜。擲葉落山路。枳華明驛墻。

(銀)

因思杜陵夢。鳥雁滿江塘矣

夢乃きたる百まくら 洗柳

月影を猶うのこれる曙。ふと一枚の花よ笠の露
笹よりおもなる文字の形あらはれて。ふかき文字
ふ依よりてこれの串を創て。客をおもてなさ
抱き。庵の後乃にもあざを彫。神ハ山の端より顔
や雪うそうそん窓乃ら。
○五燈會元曰。百丈禪師毎上堂。有一老人。隨衆聽
法。一日衆退。唯老人不去。師問汝是何人。老人云

非人也。於過去迦葉佛時。曾住此山。因學人問大修
行底人。還落因果也無。某對云不落因果。遂五百生
墮野狐身。今請和尚代一轉語。貴脫野狐身。師云汝
問。老人云。大修行底人還落因果也無。師云不昧因
果。老人於言下大悟。作禮云。某已脫野狐身。住在山
後。敢乞依亡僧法送。師令維那白槌告衆。食後送亡
僧。大衆聚議。衆皆安。洹槃堂又無病人。何故如是
食後師領衆至山後岩下。以杖挑出一个死野狐。乃依
法火葬。師至晩上堂。舉前因緣。下畧

(青)

花のちりもむ三井乃行厨 和隨

○千載集云 園城寺の花を詠うる歌
いみへよかつらぎやまの桜花をそいつもろ後

○新千載集云

百とせのうゑ木もいまや苔ふりぬ志賀のむ蔓　後成女

○俊成卿女家集に秀郷乃詠哥ありて侍りけり

院より寄附のよし詞書して天竺被園精舎乃長廊に絢まぜ蒲窣。涅槃経乃文を寫させ供養ありけるに。又永暦騒動ぬ。山徒打破りて。重堂乃像ふたゝび焼亡。其時乃形を移して。彼をねうさぬいとゝ城寺にうつしまでぬ。其後又焼亡。天智天武持統三代の勅願と成りし。○園城寺乃鐘ハ三井乃晩鐘と書ふ。と乃金堂の水呉竹乃節ハ三井といひ。智弁大師開山乃時ハ造りて。其乃弥勒の像を安置し。なかうもと。崇福寺と号そ。又この内に三井水を名ける事そ。天智。天武。持統。三代乃帝の御誕生ありけるゆへ。よて三井とハいふなるへし。

○朴長老題二三井一晩鐘一詩云

湖面朦朧暗畫不レ成　昏鯨高響出二園城一

霞間好是客船月　十倍風橋半夜聲

（紫）

吳竹乃　封疆の雪

みぐれの田面。水流のもかつおの宮形の封疆より
こぐれそう曙。月そらに乃ち增うし影瘦そうる野もて乃ち鐘
乃ちうこそうく。人絶たるそうそ我あそうふるそう

○封疆　禮記月令云。王命布農事命田舍東郊皆
修封疆審端徑術矣○言て耕作そう田畛小舍りて
東の郊ふうる屋にそくそくそくめて農事を督さくめ并田
乃隰う界を修理そうを修封疆といひ人おむ徑を
にそう水我やる邑申乃術ををを端徑術といつう
うやあうむ

○封埌　拾遺録云禹治水所穿鑿處皆青泥封記
焉玄龜印其上今人聚土爲界乃遺事也此封埌之
始也矣

○玉篇集　詞そうさ事聖乃行の雲彩うそうあそう

こそうふうる人そ住そうう　宝系統
○我古今　蜀かそうそ
凡乃さとの雲みそうみそうふうる人そ　ねふ行乃今
うわ　宝系統

蘇そ乃メ　聖云来迎　見矣

○往生要集云。凡惡業人命盡時。風火先去。故動
熱多苦。善行人命盡時。地水先去。故緩縵無苦。何
況念佛功積。運心年深者。臨命終時。大喜自生。所
以然者。弥陀如来以本願故。與諸菩薩百千比丘
衆。放大光明。皓然在目前。時大悲觀世音。申百福
莊嚴手。擎寶蓮臺至行者前。大勢至菩薩。與無量
聖衆。同時讃嘆。授手引接矣

○我古今集　聖云来迎衆徒しまふ　寂室注師

しるのやうなるものうちそゝぎ琴乃柱風
○昔の殿上集云、三河の聖(ヒジリ)といふ。大江定基(オホエノサダモト)朝臣(アソン)
法師(ホフシ)となりて。こゝのくにゝ下(クダ)りたる時。りの妻(メ)を捨(ステ)てたゝひ
なく泣(ナ)くしまゐ女(メ)とをひ出(イ)でゝくだりけるを。
つくく女(メ)をとうちをきて。ほのかにうちなげきかの
すつるこゝろぐるしやとおもひけるまゝに。扇(アフギ)乃面(オモテ)に
書(カ)つけゝる。
てむすめ乃書(カ)のこゝろをとゝめてもとゝまらぬ
をとゝめぬるふうらみあるべしやとよみけるを
かりのやどりとてもうひうきものがたりとぞ

いてゝざりうれぞ。ひけるまゝに仏ふなりぬ
多(タ)ゝとゝろ悦(よろこ)びくもゐふるまひ
法名寂心
乃事ふうりて。
橋川(ハシカハ)よりもりて。源信僧都(ノボ)乃
もとへつかはしける。
笙歌遥聞(シヤウカはるかにきこゆ)孤雲上(こうんのうへ)
聖衆来迎(しやうじゅらいがう)落日前(らくじつのまへ)
とありければ。
○定基法師寂照傳。元亨釋書十六巻ニ見

銀

もゝ吉(フヂ)の乃 舎利(シヤリ)の寶殿(ホウデン)　可理

雲ふもゝ吉(フヂ)ぬ。吉(フヂ)の二月乃十日乃

日乃(ノ)むつ(ツ)く。忽(ソウ)疾(シツ)畏(ヰ)とつふ(フ)まれるごさ者。牙(ゲ)舎利を
ゐろく(ニ)迎(ムカ)ゑ(エ)ろくを。韋(イ)天(テン)将軍追(シヤウ)うけくとりかへ(エ)しを
し仏舎利も。奈(ナ)涌(ユ)もふとくまうおかつ(ツ)てまつ(ツ)りに
元(ゲン)せ利(リ)益(ヤク)ありこの。手ごとの九月八日も。舎利会おこな
れ侍りく。法人よあ(ア)
○昔(ムカシ)唐(タウ)の僧(ソウ)集(シフ)云(イハク)。世(ヨ)に伝(ツタ)へ云(イフ)。阿(ア)育(イク)王(ワウ)の
寵(チヨウ)乃(ノ)林(リン)の如(ゴト)き下(シタ)に。
○又(マタ)別(ベツ)伝(デン)に。法(ホフ)隆(リウ)寺(ジ)にかくし宝(ホウ)殿(デン)の扉(トビラ)ひらくれ侍(ハベ)るとき。
その午(ムマ)時(トキ)ごろ。
黒(クロ)き式(シキ)部(ブ)山(サン)舎利とふ(フ)まれるを。
南(ナン)無(ム)仏(ブツ)乃(ノ)舎利をいだせ給(タマ)ふとも。
いつも双(ソウ)涌(ユ)。○南(ナン)京(キヤウ)異(イ)伽(ガ)集(シフ)に記(シル)されく侍(ハベ)るを。ねこ(ハ)
ろくおぼ(ホ)ふ書(シヨ)なり。
○舎利　大日経疏云。梵(ボン)云(イハク)達(ダツ)磨(マ)馱(ダ)都(ト)名(ナヅ)為(ク)法界(ホツカイ)身(シン)分(ブン)也矣。○大般若経音義云(イハク)設(セツ)利(リ)羅(ラ)梵語(ボンゴ)也。古(コ)
譯(ヤク)訛略。或云(イハク)舎利。即(チ)是(ゼ)如来(ニヨライ)
天竺(テンヂク)の米粒(ベイリウ)と舎利とふ(フ)
なり。

是體義分義(なり)。佛之舎利。亦名(ヅ)二如来馱都(ト)一。言(いへ)是(レ)如来
身(一)分(ブン)(り)也矣。○大般若経音義云(イハク)設(セツ)利(リ)羅(ラ)梵語(ボンゴ)也。古(コ)
譯(ヤク)訛略。或云(イハク)舎利。即(チ)是(レ)如来碎身(ノ)霊骨(より)也矣
天竺(テンヂク)の米粒(ベイリウ)と舎利とふ(フ)
なり。
○慈恩上生經疏云。舎利(ト)者稲穀(の)也。馱都者體(ナリ)也。
佛躰(ノ)大小(ヒロサ)如(レ)稲穀(の)量(カサ)。故(ニ)以(テ)為(ス)二名(ト)一矣
○大廣智不空三藏作。舎利禮文云。釋迦如来(ノ)真
身舎利(の)本地法身(ノ)法界塔婆(ナリ)矣
○むつ(ツ)く。南天竺(テンヂク)の金剛智(カウチ)。観音(クワンオン)の誓(セイ)海(カイ)を渉(ワタ)らく。大唐(タウ)に到(イタ)
を渡(ワタ)うたまふ。等星(ホシ)の如(ゴト)く。梅(カヂ)を折(ヲ)。帆(ホバシラ)柱と砕(クダ)さ。洪濤(コウダウ)
ましまし。猛風(マウフウ)にうかぶ吹(フ)く。
たちまちにあぐりて。山を裂(サキ)てまぢびて。三十余(ヨ)艘(サウ)の

商賈。流れかくゆきさだまらざるをいふ。三蛇乃転又梁
沒ぜんとて。船をさしよせ。水中乃宝珠。珍物の大なる
等をふいうるまで。海底より捜りとりくらべ。仏舎利よりも
多和尚牙をとるまでもたゆまずして。心ざし切なるをいふ。
さとり一里ならず乃至。玄宗皇帝。開元七年より。唐朝ふかく
なり。東夏をしたひ南天乃風を傾さ。一朝盛よ三密乃
教を施しとり。仏舎利永く陽法乃宇宙として。今ふ
傳ふるまで

○大師御記云。三十國相承大日本國東寺佛舎利
八十粒入壺二壺有甲乙。其中有金色舎利一粒。是
金剛智阿闍梨。従南天竺持来。付大廣智阿
闍梨。廣智又傳與青竜阿闍梨。恵泉和尚。又傳場

空海斯乃傳法之印信萬世之歸依者也 塩嚢抄 二見

法のあるじ乃如来宮殿 一道

○新古今集云。五月雨乃
まだらなるまでふりつもる
紫乃雲のたゝずまひ
○楝 玉篇云。楝音練。本草云。阿布智 其子 如小楡類白而 黏
可以浣衣者也矣 ○多識云。楝 阿布知。今俗云世
多宇 苦練 圖經
○富士根白ふ楝を風つゝみ
ぬるそ○歳時記云。自初春至初夏有二十四番風
始於梅花終於楝花謂之花信風矣
○蓑もこゝろをしらぬ

でうそうまねう ○櫓乃吳名を云云 幸春

富士をなどめの乃夕日ちらく

有馬富士といふこと。温泉のわき高き嶺なり。富士と似るゆゑ名とす。一云掌突元とうく雲ふかみ秀つゝそ立る 紫 清雪のむ 赤人 ノウ セン

○新千載集 雪そなを我ぬりてふる富士の山 有忠

雲風のうちふく

俊右

まうとむかへてねぎ 夏乃末うり私うは 狀も牽牛もうつくしけく花開 丈なり。秋の實 英をむもぶ。苔さゝ三す計。そう狹霧 ○詩小雅 苕子華篇 曰。苕之華芸其黃矣。注云苕陵苕也云云 ○本草云。卽今之紫蔵蔓生。附於喬木之上。其華黃赤色。亦名凌霄矣 ○同註云。紫蔵一名陵苕。蔓生依大木。歳久延引。至巔有花。其華蔓乃盛矣 しい色赤く苔ふう 根俗乃楸小のぐ ○多識云。紫蔵乃宇世牟可豆良 矣 ○酉陽雜俎云。凌霄花中露損人目矣

蝙蝠（カウモリ）ひるとみゆくすゑ　釣月

○抱朴子ニ云。千歳蝙蝠色白如雪。集則倒懸。脳重故也。此物得而陰乾末服之。令人壽萬歳矣

○下學集云。似鳥與虫形。爲伎而欺人。故勢經。喩末世比丘。似僧非僧。似俗非俗云。蝙蝠比丘也。此虫百年之後。成白蝙蝠。倒懸枝或岩崖。見人正行。却似爲劇行也。又云伏翼矣

○佛藏經曰。譬如蝙蝠欲捕鼠時。則飛空爲鳥。而實無有大鳥之用。其身臭穢。但樂暗冥。舍利弗破戒比丘亦復如是。既不入於布薩自恣。亦不入王者使役。不行白衣不多出家如焼處殘木。不復中用矣

○白氏文集洞中蝙蝠詩云

千年鼠化白蝙蝠　黒洞深藏避網羅
遠害全身誠得計　一生幽闇又如何

○東遊記。建仁三年六月三旬。添木家。駿河國富士の猟舎よりふもとの禁よ大なる谷あり。それを人穴を号とそ。あを究めんがために仁田宮忠常従ひ入ぬ。人穴より入ては遠一町一里を経ぬ。は洞狭くして。暗をおそれ。くらくあるさらでも。真よ進むこと又暗くして。おそろしかりけり。蝙蝠あまた飛ちがひ。蝙蝠を避ては遂大河のほとりへ出ぬ。逆流ものすごく流れ。深くふかくとうとうとして。底もみえず。岸よ沿ひて。行向よ。道を見ず。高低四人ともちまちまに。忠常ハ

彼霊乃(ノ)ヘにうく鋼(ハガネ)をそゝのふ投(ナゲ)入(イレ)うく傘をかたふけ

(紫)てゆうまうと矣

九餅(アラレ)ふるゝ二月(キサラギ)の十四(モチ)日　衆春

ふる松乃(ノ)下(シタ)別(ワカ)るゝ雪(ユキ)もなし。涅槃像(ネハンゾウ)うけもり。摧(クダ)つゝ書(カク)筵(ムシロ)焼(タキ)。九餅(アラレ)

もゝ(ヒ)と葉(ハ)しの(ノ)涅槃像(ネハンゾウ)うけもり。摧(クダ)つゝ書(カク)筵(ムシロ)焼(タキ)。九餅(アラレ)

ふるゝ(イリ)まめおもてくま(メ)なく(ク)降(フ)をたゝ(ホ)ふ(ム)と。経(キヤウ)会(エ)仏(ブツ)恩(オン)を報(ムク)ふ

あるべし。又(マタ)凡(ボン)まの(ノ)こゝろもいあ(ア)ずう(ウ)

○涅槃経曰。爾時世尊三反入(テ)二諸禅定(ニ)一三反示(シ)二誨衆(ニ)一

已(テ)於(ニ)七寶(ノ)牀(ニ)右(ノ)脇(ヲ)而臥(シ)頭(ヲ)枕(テ)北方(ノ)足(ハ)指(ヲ)南方(ノ)面(ハ)向(ヒ)西

方(ニ)後(ノチノ)背(ヲカ)東方(ニ)其(リ)七寶(ノ)牀微妙(ノ)瓔珞(ヲ)以(テ)為(ス)荘厳(ト)一(ス)切(ヘテ)世尊

娑羅林下(ニ)寝(シ)臥(ス)寶(ノ)牀(ニ)於(テ)其(ノ)中夜(ニ)入(テ)二第四禅(ニ)一寂然(ト)無(シ)声(ヲ)

於是(ニ)時頃(アテナ)便般涅槃(ニ)入(リ)二涅槃(ニ)一已(テ)其娑羅林東西二(ノ)雙

ほとゝぎす

ほとゝぎすをとゝ乃(ノ)嬉(ウレ)のたよりやあをとゝぎす　お摸

西行

○山家集

初(ハツ)ねくるむ乃(ノ)ちもいまだそのこ月(キサラギ)乃(ノ)ころ

○重明親王(ノ)室四十九日(ノ)江相公(ノ)願文(ニ)云(ク)

生者(ハ)必(ス)滅(ス)釋尊未(タ)免(レ)二栴檀(ノ)之煙(リ)一樂(ミ)盡哀来(ル)天人猶逢(フ)

五衰之日(ニ)矣

(紫)

風(カゼ)流(ナガ)れ汲(ヨブ)柏(ヒノキ)磯(イソ)のみ院(イン)　燕義

別延道記云。龍(リウコウ)興(ヒ)寺(テラ)の(ノ)ち龍(リウ)門(モン)寺(テラ)と(ト)

かのところ(ロ)乃(ノ)あとにて(ニ)ちいさき堂(ダウ)ありて(テ)ぼ(ホ)ん(ン)を安(アン)置(チ)

せうぶ沼をやくそ絶ひなむひて。海岸孤線の雪いて
興ひらう。汐干のなごりのころかもちまうけ。磯のい漁人乃
家かほくて。そこ網をほしをさゝれも。人これ
鼻おもひくまうへなのがれを下宮上ノ宮とゝく。天女
乃羽衣ノ一ほを。十町もうう一海ふめぐりて。岩を
ひろ。潮とゝうてうつぬ。獨紙の海猫ちかり
ぐうかにうく人住めべし。雫うつく侍よあふをゝちち
天女ほ舞一まつ岩屋なりこれうおくいけるおれして
入ゝうう。ゝにう一あるいせんとらへと下乃ゝふ女を
ゝうれど。あゝうりとうくてうつぬ。獨紙の海猫ちかり
て。申牡の草をゝうく。辨慶乃筆ゝうといふ。ゝみ巻之祝
乃池とつふあり。ぴゝゝうくかゝうあゝうう。

西塔強一梁獨出ノ暮　更將ノ筆硯ノ助ノ源君

到頭文武倶無用　只合終身臥白雲矣

○東遷云。遠保四年正月。お模國江納ノ神社宮あり。
大海ゝうちまちふ陰ノ変ぜ一えんく。獨ノ家舩乃燭ゝう
ゝ一免んと。籠舎のゆ甲。法人拜をゝふ添寛和。三浦ノ系
乃射義村ゝてこれをゝうせ一むうよぴゝうくいひうくゝ。未
代希有乃神変なり矣

○杜子美浩城縣香積寺官閣詩云

寺下春江深不流　山腰官閣逈添愁
含風翠壁孤雲細　背日丹楓萬木稠
小院迴廊春寂寂　浴鳧飛鷺晩悠悠
諸天合在蘿蘿外　昏黑應須到上頭

磨儀乃風ふおりひあいせうく。ぴゝうの後よりぴ。ぎゞめゝへ
ふなうへ一

浸田秋乃せくく牛岑を咏　西房

はるく〳〵田中のそれ〳〵柳。誰おもはくまく三年岑
なる兒。ぞと乃里うらおもひ乃堤よ夕見秋のそら。
はるる乃うくひそうふかくのわそけや尾と乃
まよ私さひ〳〵さ　○雷震晩村詩云萬蒲平湖水滿
阪。山蜻落日浸寒漪。牧童歸去横牛背。短笛無腔信口歌矣

朋乃葉のそよ〳〵盃の月　哥和

七月十五日ふとくおふ棚をくさ。おが佛乃おふ棚をくさ。さゞらを
やよ那の花の葉ふとおそさ。その聖山その瞳を祈りてし。
真木の小枝乃葉木の作るよ。東のそよ〳〵雨大葉の
七瑞乃茄子。亡母が園乃おさ〳〵ひねぐりたるまいあるね

られ行乃伏見桃。要よ仙のんをう女〳〵。おひさの山科
林。そうう根草。まき蒔ハ蒔乃下并戸むそびあぎく。富縄掛ケ呂れを
肥をむつく。棚経よ
うちなら〳〵たる。ぼ〳〵ぼくあそおふ

○盂蘭盆經曰大目犍連始得六通欲度父母報乳
哺之恩即以道眼觀視世間見其亡母生餓鬼中不
見飲食皮骨連立目連悲哀即以鉢盛飯往餉其母
母得鉢飯便以左手障鉢右手摶食未入口化成
火炭遂不得食目連大叫悲號涕泣馳還白佛具陳
如此佛言汝母罪根深結非汝一人力所奈何汝雖
孝順聲動天地神祇邪魔外道道士四天王神亦不
能奈何當須十月方衆僧威神之力乃得解脫吾今當

苦之器所以仰大衆之恩光救倒懸之急此義
以制名也矣○父母恩重經云阿嬰懊惱于十月之中
極是辛苦也有十月一懷三生子忌憂恩四嚥苦吐甘恩五廻乾就濕恩六乳
哺養育恩七洗濯不淨恩八遠行憶念立門悕望恩九爲
子造惡業恩十究竟怜愍恩矣○心地觀經云慈父
恩高如山王悲母恩深如大海我若住世於一劫說
不能盡矣○阿含經云供養父母功德果報與一生
補處菩薩果報等矣○四十二章經云若人以飲食
施凡夫百人不如施一善人若施善人千人乃至施
十信羅漢支佛不如施三尊教度一世父母矣
○涅槃經云知恩者大悲本不知恩者甚畜生矣
○安居乃事　安居とやすく居うとよむ也。諺ハ仏の

說救濟之法給一切難皆離憂苦佛告目連十方衆
僧七月十五日僧自恣時當爲七世父母及現在父
母厄難中者具飯百味五菓汲灌盆器香油燭牀
敷臥具盡世甘美以著盆中供養十方大德衆僧乃至
有供養此等自恣僧者現在父母六親眷屬得出三
途之苦應時解脫衣食自然若父母現在者福樂百
年若七世父母生天自在化生入天華光矣
○目連始得六通爲報父母恩三界內見母生處初
墮地獄次墮餓鬼道後成畜生犬也救母經云
○釋氏要覽云盂蘭盆此釋子孝報恩救苦之要
以目連救母爲始也梵語盂蘭此云救倒懸也盆則
此方器也矣○義淨云盂蘭者西域之言此云救倒
懸即飢虛危苦謂之倒懸也盆乃東夏之音此則救

弟子たち。毎日に乞食に出て。食物をうけきたりて。昼に
檀那乃供養によりて。頭陀乞食をもおこたれば。仏法
を工夫坐禅して。居所安くし給ふによりて。すなはち
安居といふ名をなづけたり。それからのちに三月九十日なり。
されば夏乃安居。冬の安居あり。これを前安居。後安
居といふなり。夏安居とは四月十六日より七月十五日に
至るまで。七月十六日より十月十五日に至るまでを自
恣といふなり。冬安居とは十月十六日より正月十五日に
至るまで。正月十六日より四月十五日に至るまで。自恣
といふ。凡四九三十六とて。三百六十日を。二度の安居と。
二度乃自恣とにこれを分てり。又四月十四日より
入まで。七月十四日まで出家は。四月十六日より入なば七月
十六日に出る。故に自恣乃日を。七月乃十四日。十五日
十六日なり。中にも約して。経には七月十五日と説きたまへり。
此事。四分律。五分律。及。梵網経等に見え
○公事根源云。内蔵寮。仏に供をそなふ。昼御座の
南乃方に。菅円座一枚をしきて。盆をおきて。御拝
あり。御盆の始は。天平五年七月にはじめたまふ。盂
蘭盆と。大膳職にてこれをつかさどれり。盂蘭盆は梵語なり。
倒懸救器と翻訳して。倒懸とはさかさまにかかるといふ心
なり。餓鬼のくるしみをあらはす。さかさまにかけられたるが
ごとし。救器とは此餓鬼の苦をすくふうつはものなり。仏
弟子目連。じんづう六通をえて。その母乃生所を
みるに。餓鬼の中にありしかば。これをかなしみて。仏
におしへをこひて。此苦をすくはんことをもとめしかば。
七月十五日に自恣乃僧を供養せよ。かならず解脱を

ねむと云ふ（サイメ）齋は天皇乃忌詞。齋宮（アスカ）は齋ひ清まはる意。齋垣は齋ひ籠る垣。齋屋は齋ひ籠る屋。齋戸は齋ひ祭る戸。齋瓮は齋ひ祭る瓮。齋服殿は齋ひ清まはる殿。齋庭は齋ひ清まはる庭。齋鏡は齋ひ祭る鏡。齋刀は齋ひ祭る刀。齋玉は齋ひ祭る玉。齋杖は齋ひ祭る杖。齋柱は齋ひ祭る柱。齋槻は齋ひ祭る槻。齋笛は齋ひ祭る笛。齋琴は齋ひ祭る琴。齋鉾は齋ひ祭る鉾。齋鋤は齋ひ祭る鋤。齋斧は齋ひ祭る斧。齋鎌は齋ひ祭る鎌。齋鍬は齋ひ祭る鍬。齋鉏は齋ひ祭る鉏。齋鋸は齋ひ祭る鋸。齋鑿は齋ひ祭る鑿。齋鉇は齋ひ祭る鉇。齋鎚は齋ひ祭る鎚。齋釜は齋ひ祭る釜。齋甑は齋ひ祭る甑。齋竈は齋ひ祭る竈。齋屋戸は齋ひ祭る屋戸。齋庫は齋ひ祭る庫。齋蔵は齋ひ祭る蔵。齋倉は齋ひ祭る倉。齋殿は齋ひ清まはる殿。齋宮は齋ひ清まはる宮。齋垣は齋ひ清まはる垣。齋屋は齋ひ清まはる屋。齋戸は齋ひ祭る戸。齋瓮は齋ひ祭る瓮。齋服殿は齋ひ清まはる殿。齋庭は齋ひ清まはる庭。齋鏡は齋ひ祭る鏡。齋刀は齋ひ祭る刀。齋玉は齋ひ祭る玉。齋杖は齋ひ祭る杖。齋柱は齋ひ祭る柱。齋槻は齋ひ祭る槻。齋笛は齋ひ祭る笛。齋琴は齋ひ祭る琴。齋鉾は齋ひ祭る鉾。齋鋤は齋ひ祭る鋤。齋斧は齋ひ祭る斧。齋鎌は齋ひ祭る鎌。齋鍬は齋ひ祭る鍬。齋鉏は齋ひ祭る鉏。齋鋸は齋ひ祭る鋸。齋鑿は齋ひ祭る鑿。齋鉇は齋ひ祭る鉇。齋鎚は齋ひ祭る鎚。齋釜は齋ひ祭る釜。齋甑は齋ひ祭る甑。齋竈は齋ひ祭る竈。齋屋戸は齋ひ祭る屋戸。齋庫は齋ひ祭る庫。齋蔵は齋ひ祭る蔵。齋倉は齋ひ祭る倉。

○梧桐　陶隠居本草注云桐有四種青桐音同梧桐上音吾岡桐桐音筒名皆木里梧桐者色白有子者今俗呼爲青桐是也二音讓土桐者白桐也三月花紫亦堪作琴瑟者是也○周書云清明之日桐始華桐者不華成有大実矣○白氏文集云拠花雨潤新秋拠桐葉風翻欲夜天矣○実乎抱（ダキ）面るう相乃廣葉を百ちてなさけ深き風乃書るう郎

○邵子詩云梧桐月向懐中照楊柳風吹面上来矣

○桐本を并よふ棟（ヲウチ）侍ふ事乃。燃（モエ）とい毛（ケ）ひろふくも苞入（ツトイ）ろ也。人香（ノミ）ねまて。忽（タチ）死（マカ）なり。ろふふ風（カゼ）とい。梧桐（アヲキリ）を棟（ヲウチ）とも。燃（モエ）るふ風（カゼ）をおそるゝ也。ろ人乃もむ未（マダ）れそとゝ。桐の木もれそろゝにより。燃（モエ）毒（ドク）を并（サイテウ）中よ入（イ）ごがるふ。并（サイテウ）よ

（紫）傘（カラカサ）抱（ダキ）くるかまそ

○天隠遠寺晩鐘詩云

山童背（カタ）笠伴（テ）僧行　　偶（タマ）訪村家（ノ）喜快情

空翠濕衣歸路遠（シ）　　片雲碧合暮鐘聲

桃波

以侍乃作者矣陰ん。建仁寺大昌院乃住侍ら。表徳号黙雲諱龍澤。錦繍陪と擇一人なり

○傘　事物紀原ニ曰六韜ニ云天雨不レ張レ蓋幔周初事也通俗文ニ云張レ帛避レ雨謂之繖蓋即チ雨傘之用ハ三代已レ有也繖傘ノ字通スト奥

さとり字めぬ　獄士の黄昏　笑堅

○苔の庵集ニ云　識蹴神飛観難レ成レ就とのふまと身を修くすまてもろ〳〵もるゝわろを聖ゑのいれりとのろ修へ　此の注脚

○安樂集曰問テ云一切衆生皆有レ仏性遠レ参レ尓応レ値多仏ニ何ニ因テカ至レ今ニ仍自輪廻生死ニ不レ出ニ大乗聖教ニ良由レ不レ得ニ二種勝法ニ以テ排ニ生死ヲ是以不レ出ニ火宅ニ何者爲ニ二ト一ニ謂聖道二ニ謂往生浄土ト其聖道一種今ノ時難レ證ト一ニ由レ去ル大聖遥遠ト二ニ由レ理深解絶ト是故大集月藏經ニ云我末法時中億億衆生起行修レ禅有ニ一人ヲ得レ者當今ハ末法是五濁惡世唯有浄土一門ノミ可レ通レ入レ路矣

○往生要集増進佛道樂下ニ云今此娑婆世界ハ修レ道得レ果甚タ難レ何者受レ苦者常ニ憂受レ樂者常ニ著レ苦云レ樂ト遠離解脫若レ昇若レ沈無レ非レ輪廻適レ雖有ニ發心修行ノ者亦難レ成レ就煩惱内レ催惡縁外レ牽或發ニ二乗心ノ或還ニ三惡道ニ矣

○往生十因云幸ニ今値ニ弥陀願ニ如レ渡レ得レ船如レ民得レ王巨石置レ舟過ニ大海ニ於萬里ニ鼓レ虹附レ鳳翔ニ蒼天ニ於九空ニ況乎行者至レ誠相ニ應本願ニ然ニ日月如レ走冥途在レ近若レ

競餘日不勤者。遇淨土教。又何時早抛萬事。速求下

心奥

夢うつゝあれなふもかる

長吉

○高岳相如作石山寺詩云

泉飛雨洗攀開夢　葉落風吹色相秋奥

○宝治拾壱年十三云　八くゑむかし。生城乃ふ。上簾一堂を
建るといふる寺ありてより後。年ひさしくなりて。御堂も
かたぶきてあれくしら修理もなくてありしけちか
別当侍りしさ。そのなをえ上覚とあんいひしかご。ありぞの寺
のお当乃子にありる。あひつぎにて帝にそくろい。たで
ありけるが。よくあるそてありくあまりけ。侍
大師の。唐土なりく。天台宗なりてそん所とえてし給たりしに

けるのかきとぞ給ふかきてはかりける。云。雅。法慮。
上覚出家すると。ころの中よいぼれうよう人ぐへとあれ
ど。此寺の地を。他にすぐれてみえて。されど。当寺にも
かしこくべきとありかれぞ。それよりくとてみえて
なりぬと申んでとるさ。あるまじ。いかなるにか。さありて。
とうく侍まり。それよ上覚が夢に見るやう。前又の前別
当。いとどう老て。杖つきてくいでまかりよるやう。あやしく
来乃けよ。大風吹てけるさまをきるんとに。ぢかるに寂けし
寺の瓦の下に。三尺ばかりの鈴なくなんゆきさがりてなく
れもなく。あく。世ぞくてくさあるよみえて。あさましう苦
しきめをなん見るなるまかれぞ。こわれて落る。遥あり
うぞ。童うちつきとどて。そのときはかおふゆん堂
みうちせでしく。賀茂川よそちててよ。さうしてぞひろを

やどろぐんだ。あるふゆさえ夜のそーくうんあるごでさと
いっぷ。夜さめてかえるふ夜をとうろんとうまとうろうでいるう
まふとといひえく目うまねぷそれ目ふなりえく。年のはの
ねぷんてあうてく。あぐでもにくろいさうまた。風いよく吹
さうりえく。村里乃家どもこうる吹えるっ。野山乃竹木
ゑまれおまねぷげるゆとふひでうのなぐうふ吹きよ
さまね。狸(ムジナ)おれ猿(ムジナ)くづれえくとぐるっ。さうえようえ狐
乃中よぷどーえろのゑれきまわりえくふ。ちこうるうまいを
おほうりぷこうりえうう乃老ども。捕とさびてこうるうさいを
さうぐかとふ。三尺ばうなる鰻(ウナギ)乃ぷさくとてふ
そひぷさうり夜ぬぐとくよえがあるねうぷ。ぷまもひも
あへぷど。魚乃ちこさふきまるふふまるてうる杖(ツエ)

おざりろれぞ。苦痛（クツウ）ーろ
がりろ。鯰尓（なまづに）でろびなりふりろるん

志ろ川夢丹（しろかはゆめに）春をもぐさ和（ねて）

九十五百九

智恵伝町（ちえでんちやう）よありろろ。鼓垣（つづみがき）乃ごとひろろいみあろち
うふりーさなそびおろよなんまろろをつめー手の盃
風よ。面（おも）をほろびぃ景色（さま）尓盃（さかづき）やうの物もるるれてて。
いとひろでうなものろりぃがろととろでぃ野の好情（こうせい）
とひろん。情（なさけ）尓愚（おろか）乃あろーまろりぃこれ
ぼろろぐぅー垣乃ごとひろろんんぃうぐ抱（いだ）いそんぃぐ
おろをむらんとひろでぃぱ手（て）ーも。
借（か）ろう小坂（こさか）をもひろりぃあそれろるほのでぃぅぐ
てーろろとさやれろろ

桜桐乃ろやーまさうぐタ三

改訂

尻乃ホろめろんぁやし
扉（とぼそ）よ入ろろを。役者（やくしや）おろとろ
みろろぐぅれぁんぅー垣のごと
をーろぅぅれど。納（をさ）ひて
紙よおくひろりろろ

むろむの書そほのぐくと
をぐぐろぅ ぴろろろく書つ里（さと）それで。ありろぐりぐ附（つ）
鏡（かがみ）ぐり 万金丹（まんきんたん）とりおくやりろると。人乃語（かた）れと。
青（あを）寝（ね）ぐぐひーろぐ。ろろ尓（に）ぁぐぐやろろん

青 ろぐ正（まさ）ぐくもぅえろぐぐ

桜桐乃ろやーまさうぐタ三

改訂

夏（なつ）浅（あさ）後（ぎ）の鏡乃ごろ。手の貝（かひ）をやろてぴぐでぃあをぇ

ちらばくとも雨一とをりのメ玄をてさくさいづ
くれでは雲乃縁みそ俗神をつくねぼうを祖ろろ祢よ。
まろやうのうち女のやうにして草山元政乃棕櫚を和しる侍
を吟じろまろが。わよあひろく敷くゆろ。

破笠飄飄雨未乾　脚長蓑短霽猶寒
休爲弊箒除塵土　若有狂雲拂月看矣

○夫木抄　あさまだきうぐひすなくなり
ぐろむろぐろ郎　乃家

○唐李羣玉詩云

芍藥花開菩薩面　櫻桐葉散夜叉頭矣

○文集云。西湖晩歸望孤山寺詩云

槲櫚葉戰水風涼矣
盧橘子低山雨重

○和名云。唐韻云。櫻櫚二音忽閒俗云穆魯　說文云。栟櫚可以爲索矣　○多識云。櫻櫚須呂。異名栟櫚矣

○續千載集

かきろろてそとともみそ

松葉笹　ほく

○朴長老唐嘴夜雨詩云

瀲灩湖光朝露晴　玲瓏山色暮雲横
唐嘴一夜摸稜手　半作松風半雨聲

江眼玄奄

○新拾遺集

かろ淺やさぐろろ亜を神代ろうへを松風ぐぬく

○一幸乃松張り社あり。唐嘴大明神と号をまぐと乃
六月三十日の八ツ乃男女。おつてこ乃日より夢をこめて
おびてしく祓集ろ侍ろ。小さ祓門をま向く

[illegible]
[illegible]
[illegible]

其福無盡。問云。何但空稱佛名字。便得畢苦。其福不盡。答。是人曾聞佛功徳。能度人老病。必若少供養。及稱名字。得福無量。亦至畢苦矣

○安樂集曰。縦使一形造惡。但能繫意專精常能念佛。一切諸障自然消除。定得往生矣

○往生要集曰。夫往生極樂之教行。濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者。但顯密教法。其文非一。事理業因。其行惟多。利智精進人。未爲難。如予頑鄙之者豈敢矣。是故。依念佛一門。聊集經論要文。披修之。易覺易行矣

○新古今集　釈教

我ならぬ人もさぞなぐさまれば猶もなぐさめてん

　　権律師信救

極楽はさの行業なき者の行とさしをきくらむ

奉納乃至施主等現世安穏後生善処

以上傳記ノ見

○續千載集云

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨乃至

　　法空上人

自歸ノ心ふかくなる里いるほどぞ身をすてんとは

○拾遺集　帝門ノ書ナリ

ふたゝびもあふとだにいかでしらせまし

　　雲廸上人

山奥に袋草紙をかくしおきて

帚たてゝさ風乃ふきのこしてし

　　露芝

世乃人。そ生緣聚ると。四大賢を飾そ。其乃苑ノ内ノ

花の宮ぞ世ノ一といへども。堂塔乃風暴く吟ろく。勿

化してちりとなるべきものなり。五蘊處を要ひ。我の林乃
業乃命保つといへども。ほろる乃雲巖くに侵して。速やか
零くく枯るが如し。一生一死人として若紫のみよ溺るゝ
ま。多ちまちに乃ちまねくいくぞくう墨染乃腸を断。
ほとゝふきのむづきあるくぞよ。又業むづきよあるくぞよも
くまねと苦くくう。いりあひ乃うめぞあくぼそゝ
○三教指歸ニ曰無常暴風不レ論ニ神仙ノ奪精猛鬼不レ嫌
貴賤一矣　○性靈集曰此身脆如ニ泡沫一吾命假如ニ夢幻一
無常風忽扇四大瓦解鬧魔之使乍来六親誰悲矣
○向門上人云。嗚や又世夢老をまくらべ。報鬼くうさを
知るさるぞ。命のうぎり乃さごとんさこくう。そのこと
をく覚ゆれたくぐくと老後のめぐりをもちりにー云ふ。
取うやく寝命乃ちぎまるまをもるふくみもちや書ね。

くふ乃命をもうぐひて滅じぬのくう命いくぐう。
あをまぐくいありくやもくやもくんもくぞ。ふみとまれあるね
くまねとちぎまりてゆうんわぐふ。ちあよいくいう同
いうさゆにくてあべきの目いづれ乃時。いくまう病まう乱。
だ。ふみぐう自ふあくんぜ生をいぐれ
くまねまでてうあうやをくれ。目毎よさうをあやうれる。
人ぐふあさにおくりていゝ老くう紙をなのくぞをなぐけて
乃我よくくむことぞ。老くう紙乃くをくぐ
さばくあくて。学堂乃いまをものれをあやぶめんまを
くれくりぞれでかくぐ巻を往つき食とやおり。人を
乃くふもあくいふくあくあ世よくあるまぞその
あまくう乃我ねくれんぞくくかくうとんぞふまで

ゐばをこそ なもやなろばをゐろく 拙あふなりね。
とゐねそゐ我記 ひとりたちゐるべをこれもいつまでか
ゐふろうんとそろ ゐるぐ我ゐるぐ我ひをいつゐるぐ 標。
なそろびてゐそどたゐろはゐるぐそろりとを
うふほをを露。未ゐろうくいまゐれども。そろの雫(シヅク)とゐろ
ぬやいある。を東俗(トウゾク)(ゼンゴ)前ほのたゐる。かだゐををそてく
いほちへうさる。をとろりゐとやなりふろん。拙く来ゐ
そろそ。小芝(ホノババウ)新蕎(ニンキウ)の骨(ホネ)。たゐるを我そろれるくいぐぐく
うおふ。古とろり所(イ)とゐろくあとうろろる。せろくく
をあてうあろめ。ゐろ江のろろるのろろ幸郎(ゐ)
だろも。誰(タレ)ゐとかくろ文字さんかをろふほゐろろ処(カナ)
ゐれ矣 ○三部七冊拗(ねぢ)文子相逢巻ニ見